

石匙の贈与論的役割 —多様な石材の意義の考察—

保 坂 康 夫

1. 本論の動機
2. 石匙研究史における贈与論的役割についての論議
3. 石匙の贈与論的役割分析の視点
4. 諸磯式期3遺跡の石匙
(1) 各遺跡の石匙
天神C遺跡

- 大木戸遺跡
花鳥山遺跡
(2) 石材構成のグラフ化
5. 石材漸減の説明原理の引用と分析結果の説明
6. 結論

1. 本論の動機

社会人類学者レヴィ・ストロースは、人間社会が「言語」、「女性（人間）」、「物財」の3重の交換システムであるとする「コミュニケーションの一般理論」を提言したとされる⁽¹⁾（橋爪1988）。人間が行う「交換」は「コミュニケーション」であり、物の交換で示されることは、物と物との関係ではなく、人と人との関係なのである⁽²⁾。

おそらく、遺跡から出土する多くの物は、人間関係を成立させるための手段としての役割を持っていたはずである。一つの物が、実用機能とともに、2重の役割を担っているのである。レヴィ・ストロースはこの発想をマルセル・モースの『贈与論』⁽³⁾（モース1968）から得ているので、考古資料の持つこの役割を「贈与論的役割」と呼ぶこととする。何をもらい、その返礼として何を与えたかという相互関係は考古学からは明確にできないが、まずはその物の存在が相互関係を構成する一方向の部品であり、人間対人間のコミュニケーションが成立した証拠として考えるべきなのである。

そして、考古資料の贈与論的役割に着目した論議の関心事のひとつは、誰と誰とが人格的关系を成立させたものなのかということである。そうした意味で、石材の検討は有益である。石材原産地から石材を送り出した者と、石材原産地から離れた遺跡で受け取った居住者との人格的关系を見て取れるのである。また、その間の遺跡で、その物を取り継ぎながら人間関係を取り結んだ人々の存在も想定できる。そこで、ここでは石匙の石材に着目し贈与論的役割を検討する。

2. 石匙研究史における贈与論的役割についての論議

石匙の研究史は古く、列島の考古学研究の初期から手がけられている（中谷1925）。山梨県内でも、村松氏（村松2003）、網倉氏（網倉2003）によって、技術形態学的検討が精力的に進められている。

石匙の贈与論的役割について注目すべき論考がある。大工原氏は縄文時代石器研究の方法論を体系的に提示した大著『縄文石器研究序論』（大工原2008）の中で、山梨県北杜市の天神C遺跡の石匙に注目し、諸磯b式新段階以降、原産地から50kmほど離れた天神C遺跡まで黒曜石の大形原石が搬入され、加工度の高い黒曜石製石匙が多数製作されていたこと、それらが単なる実用品ではなく、大形原石に代わる威信財として認識されていた可能性が高いとした。

威信財という用語について、小杉康氏による解説を引用する（小杉2000）と、威信とは「地位や品位などにかかわって他に示す権威と他から受ける信頼、特定の社会集団内の成員によって共有される意識」とされる。そして、威信財とは、「威信をともなう社会関係を形成し維持するはたらきを有する器物」となる。人間社会の財は、階層秩序をもった価値体系（財のカテゴリー体系）を成していることが多くの民族誌から確認されており、非貨幣経済ないしは贈与交換の社会において、交換を成立させるために不可欠なものとする。威信財は財のカテゴリー体系の中で「上位の階層ないしはカテゴリーに属する財（器物）であり、より下位の階層（カテゴリー）に属する生存財などとは対照的な価値を有するものである」とする。

そして、この概念を考古学研究に導入する際には次の点に留意する必要があるとする。「搬入品と認定された考古資料は、多くの場合にそれと交換された「あるもの」の存在を予測させ、それら両者は同じ財のカテゴリーに属していた可能性が高く、かつ交換を行った当事者間においても共通する財のカテゴリー体系が保持されていることを示唆している」という。また、カテゴリー間交換も起こりうるが、そのような交換は「交換当事者間に社会的な地位の動揺あるいは変動を生じさせる力をもつ」もので、交換に付随する社会関係の操作性が示されたものであり重要であるとする。

こうした指摘を重視するならば、石匙が財のカテゴリー

体系の中で、どのような階層に属するものか十分に検討される必要がある。大工原氏の指摘は石匙の「贈与論的役割」を示す重要なものであるが、石匙が威信財かどうかは慎重に判断すべきである。

3. 石匙の贈与論的役割分析の視点

贈与論的役割を考えた場合、人から人への贈与を成立・成功させるため、以前に贈ったり贈られたであろう物と同じ形態の物の贈与は避けられた可能性がある。以前の贈与よりも、ある種の価値が付加されていると相手に思われるような贈与品が理想的であろう。贈与論的役割をもつ物は、このような形態変化の志向性をもっていると考える必要がある。

贈与品として製作される場合の形態変化として、2種類が想定される。共有されたある理想像に向かって形態を収斂させるべく努力して製作される、職人的な、洗練させる方向に形態変化が進む在り方がまずあげられる。これを、洗練型形態変化と呼ぶこととする。もうひとつは、緩やかなある形態の大枠の中で、変幻自在に変化する形態変化である。これを、自在型形態変化と呼ぶ。縄文時代草創期の神子柴型などの石槍の形態変化は、洗練型と思われる。一方、今回論議する石匙の形態変化は、自在型と考える。

石匙の定義を「一対の対向する調整により、つまみ部が作出される石器」(網倉2003)とし、対向する調整を挟り加工として、石匙全体をみてみると、変幻自在な姿が現れる。まず、縦形、横形の違いについては、両者の境界部でどちらに分類すべきか躊躇する形態がある⁽⁴⁾。縦形、横形の分類は、その中間形態を無視するかたちで両極を認識するものであり、つまみ部の位置をどのように付けるかで形態を表現していると理解することで、縦形から横形へ、またその逆に自在に形態変化する石匙の姿が見えてくる。同様に大きさも、小形から大形まで連続的であり、境界を設定することは困難である。また、加工程度も、つまみ部を形成する対向する挟り加工以外は調整がみられないものから、全面が両面ともしっかりと加工されているものまで、連続的に変移し、境界の設定はむずかしい。

このように、形態をつまみの位置、大きさ、加工程度から認識、分類しようとする、変異に富んだ石匙像が浮かびあがる。こうした自在型の在り方を一体のものとして捉えて石匙全体をみると、石材の多様さが目に付くのである。黒曜石のようにガラス質なものから、粘板岩のように片理しやすいものまでさまざまであり、機能差を示すようにも思われるが、大形品を作るには黒曜石では限界があり、機能性よりも大きさの確保を優先したことで粘板岩のような石材が必要となったのかもしれないのである。贈与論的役割を優先させたことで、機能を超えた価値が付加されているのかもしれないのである。

石材にはその石材の原産地が推定可能であり、石材産

地と出土遺跡との贈与論的関係が検討可能となる。そこでここでは、特に石匙が多く出土する縄文時代前期後半の諸磯式期について、山梨県内の遺跡単位で石匙の石材構成を検討し、贈与論的役割について検討をおこなう。

4. 諸磯式期3遺跡の石匙

ここでは、石匙を豊富に出土した天神C遺跡、大木戸遺跡、花鳥山遺跡の3遺跡を取り上げる。これらはちょうど、三角形を呈する甲府盆地の3頂点の位置にあり、重要な地理的位置を占める拠点的な集落であり、石匙の贈与論的な特徴がある程度抽出できると期待される(第6図)。なお、今回提示する石材は、報告書の記載とは異なり、未報告資料(写真で示したもの)も含めて、見直し提示した。

(1) 各遺跡の石匙

天神C遺跡

天神C遺跡は山梨県北西部のハヶ岳南麓に位置する。圃場整備事業に伴い、100×120mの範囲が面的に発掘調査された(新津・米田1994)。諸磯b・c式期の住居址が49軒確認されている。当該時期の石匙の総数は83点である。第1・2図にすべての石匙を示した。石匙は半数が住居址覆土中から出土しており、次いで土坑内出土が3割を占める。

石材別でみると、最も多いのが黒曜石である(第1表)。31点で全体の37%を占める。母岩資料としてみると、透明なものから漆黒のものまでさまざまで、白濁した黒曜石で冷山系と思われるもの含まれ、信州系黒曜石ではあるが複数の原産地を含んでいる可能性が高い。

次に多いのが、珪質頁岩である。濃緑色から白緑色の地に白いスジが入る石材で、チャートと比べてガラス質の度合いは弱い。塩川上流から長野県川上村付近の秩父山地西端部に原産地がある。14点、17%と黒曜石の半分程度である。

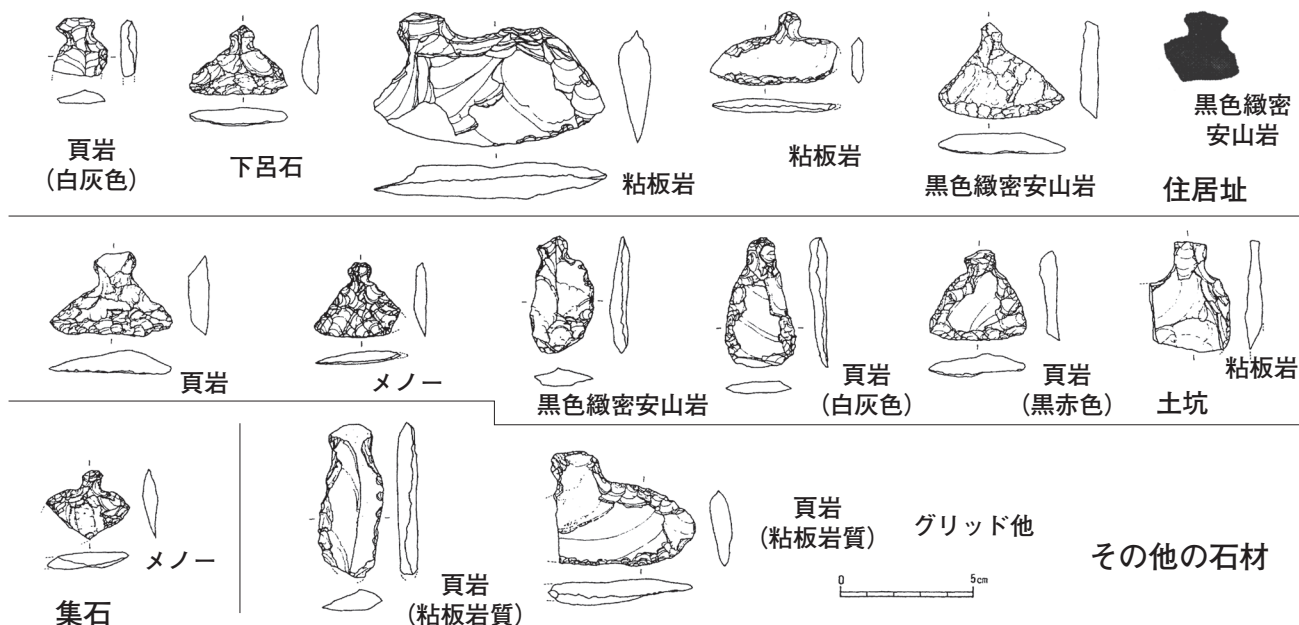
これに次ぐ多さはチャートである。白灰色や灰緑色で、黒いスジが入るものや、赤色の部分が入るものがある。秩父山地東部の原産地からもたらされた石材と思われる。12点、14%と珪質頁岩とほぼ同数である。

次いで多いのが黄色風化泥岩である。静岡県東部の愛鷹・箱根山麓の旧石器時代遺跡で多用されている富士川ホルンフェルスと同じ石材と思われる。熱変成を受けてはいるものの、その程度は非常に弱く、泥岩と表記すべきとする河西学氏の指摘に従い、この名称で呼ぶこととする。表面が風化し「きな粉」のような質感で黄色に変色しているが、新鮮な破断面は黒色であり、比較的ガラス質に富んだ石材である。富士川中流の東岸地域で、身延町の常盤川から、南部町佐野川あたりまでの地域に原産地が推定されている。11点、13%と前二者と近似した数が出土している。

その他の石材(第2図)には、5種類がある。頁岩が



第1図 天神C遺跡の石匙 (1)



第2図 天神C遺跡の石匙（2）

6点と比較的多い。ただし、暗灰色や白灰色で緻密質なものと、粗粒で粘板岩質のものとがある。黒色緻密安山岩が3点ある。いずれも黒色でガラス質が強く、多孔質の安山岩と区別するため、この名称を用いる。粘板岩が3点ある。メノールは、赤褐色で透明感がある良質なものであり、2点ある。下呂石が1点あり、注目される。

なお、石匙が製作されていたかについては、大工原氏の指摘のとおり、黒曜石の大形原石が存在し、大形剥片や石匙調整剥片も存在する。また、少量ではあるが、珪質頁岩や粘板岩、黄色風化泥岩、チャート、頁岩などの大形剥片も確認できる。しかし、その量は少量である。黒曜石原石・石核の圧倒的多数は小形品であり、黒曜石剥片の圧倒的多数は、小形原石から剥離された石鏃・石錐・使用のための剥片のために剥離されたと考えられる小形剥片である。石匙の製作はされていたが、他の多くの遺跡へ供出すべく多量に生産されたかどうかは疑問である。贈与論的交換で大形原石や大形剥片を入手することはあっても、独自の産品を製作し贈与交換のために用意されたものかは、この資料からは確証できないと考える。これらも、石材原産地から贈与論的交換により引き継がれたものと理解すべきであろう。

大木戸遺跡

大木戸遺跡は甲府盆地の北東隅に位置する。道路建設に伴い、幅13m、長さ260mにわたる発掘調査で、諸磯a～c式期の住居址が10軒確認されている（石神ほか2003）。近隣には、獅子之前遺跡など、諸磯式期の遺跡がいくつか調査されている。当該時期の石匙の総数は33点である。第3図にすべての石匙を示した。住居址覆土

中から3割が出土しているが、土坑出土は皆無であり、天神C遺跡と大きく相違している。集落全体を把握できるような面的な調査ではない点が原因である可能性もある。グリッド他としたものは、溝の覆土や谷部の土層から出土したものを含んでいる。

石材別でみると、最も多いのがチャートである（第1表）。8点で全体の24%を占める。白灰色や灰緑色で、黒いスジが入るもので、赤色の部分が入るものは見当たらない。秩父山地東部が原産地と思われる。

次に多いのが黄色風化泥岩である。7点、21%とチャートとほぼ同数である。次いで多いのが珪質頁岩である。5点、14%である。黒灰色で白色スジがないものがある。天神C遺跡で最も多かった黒曜石は4点、12%と少ない。

なお、グリッド出土の1点は、つまみ部が折り取られており、その折り取り面を打面として有底剥片（ウートラパッセ）が剥離されている。すなわち石核に転用されているのである。石匙の欠損したものは、たいてい故意に折られているが、転用例は稀少であり注目される。

そして、緑色凝灰岩が2点、6%見られる。薄い緑色で緻密質であり、単色のもの（住居址出土）と、白色や濃緑色のスジないし帯が層状に入るもの（グリッド他出土）がある。山梨県東部の桂川東岸地域に原産地が推定される。

その他の石材には、4種類がある。頁岩が4点と比較的多い。玉髄は1点で、白色の地に薄黄色のシミがみられる。黒色緻密安山岩も1点ある。粘板岩も1点である。

花鳥山遺跡

花鳥山遺跡は、1954～55年に国学院大学により発掘調



第3図 大木戸遺跡の石匙

査された学史的な遺跡であり、甲府盆地の南東部に位置する。今回取り上げる資料は、畑灌漑用水管建設に伴う調査で、幅3m、長さ270mにわたる発掘調査で、諸磯b・c式期の住居址が24軒確認されている（長沢ほか1989）。狭い範囲にも関わらず多量の遺物が出土しており、大形集落の存在が推定される。当該時期の石匙の総数は52点である。第4図にすべての石匙を示した。写真で示した未報告資料が31点と半数以上を占める。中には、折られたものが接合した資料もある。住居址覆土中から4割が出土しているが、土坑出土は3点、6%と少なく、大木戸遺跡と似た出土状況を示すが、線的な調査で、集落全体を面的に把握したものではない点が原因である可能性がある。

石材別でみると、最も多いのが黄色風化泥岩で、24点、46%と半数を占める（第1表）。次に多いのが緑色凝灰

岩で9点、17%である。大木戸遺跡同様に、単色のものと白色や濃緑色のスジないし帯が層状に入るものがある。黒曜石は5点、10%にすぎない。このうちつまみ部を欠損するものは、白色粒子を含み視覚的にはあるが神津島産黒曜石の可能性はある。チャートは3点、6%と少ない。赤色部分が入るものがある（写真資料）。

その他の石材は、7種類と豊富である。黒色緻密安山岩が4点とチャートより多くある。硬質砂岩は粒子が細かく、縦形が黒灰色、横形が薄青灰色である。メノー、頁岩、凝灰岩、粘板岩、下呂石が各1点ある。この下呂石はガラス質が弱く、他の種類の石材かもしれない。

(2) 石材構成のグラフ化

3遺跡の石匙の石材構成を、黒曜石、珪質頁岩、チャート、黄色風化泥岩、緑色凝灰岩の5石材を主要石材とし、



第4図 花鳥山遺跡の石匙

第1表 各遺跡の石匙石材構成と出土状況

天神C遺跡

石材	住居内	土坑	グッド地	小計	%
黒曜石	18	6	7	31	37
珪質頁岩	7	2	5	14	17
チャート	5	6	1	12	14
黄色風化泥岩	6	3	2	11	13
緑色凝灰岩	0	0	0	0	0
粘板岩	2	1	0	3	4
頁岩	1	3	2	6	7
黒色緻密安山岩	2	1	0	3	4
メノウ	0	1	1	2	2
下呂石	1	0	0	1	1
小計	42	23	18	83	
%	51	28	22		

大木戸遺跡

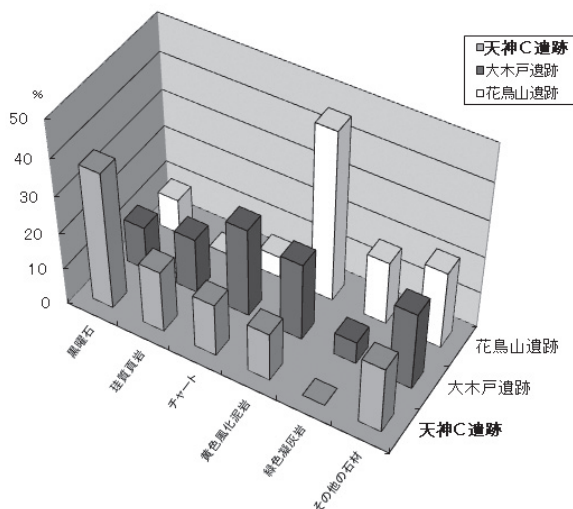
石材	住居内	土坑	グッド地	総数	%
黒曜石	1	0	3	4	12
珪質頁岩	2	0	3	5	15
チャート	4	0	4	8	24
黄色風化泥岩	2	0	5	7	21
緑色凝灰岩	1	0	1	2	6
粘板岩	0	0	1	1	3
頁岩	0	0	4	4	12
黒色緻密安山岩	0	0	1	1	3
玉髓	0	0	1	1	3
合計	10	0	23	33	
%	30	0	70		

花鳥山遺跡

石材	住居内	土坑	グッド地	総数	%
黒曜石	2	0	3	5	10
珪質頁岩	0	0	0	0	0
チャート	3	0	0	3	6
黄色風化泥岩	9	1	14	24	46
緑色凝灰岩	4	1	4	9	17
粘板岩	0	0	1	1	2
頁岩	0	0	1	1	2
黒色緻密安山岩	0	1	3	4	8
メノウ	1	0	0	1	2
下呂石	0	0	1	1	2
硬質砂岩	2	0	0	2	4
凝灰岩	0	0	1	1	2
合計	21	3	28	52	
%	40	6	54		

その他の石材は一括して合計して、6種類の石材として各遺跡での占有率をグラフ化し比較したのが第5図である。各遺跡で、最も多い石材が異なる。天神C遺跡は黒曜石、大木戸遺跡はチャート、花鳥山遺跡は黄色風化泥岩である。それぞれの遺跡にとって、それぞれの石材は原産地までの距離がもっとも最寄りであり、原産地に近いことがその形成主要因であると考えられる。

そのことは、石材ごとに各遺跡の占有率を比較した場合、さらに明確となる。天神C遺跡の北西方に原産地がある黒曜石は大木戸遺跡、花鳥山遺跡の順で漸減し、原産地からの距離に反比例して少なくなる。逆に、山梨県南部に原産地が推定されている黄色風化泥岩は、大木戸遺跡、天神C遺跡と漸減し、その占有率はやはり原産地からの距離に反比例する。チャートは、天神C遺跡、花鳥山遺跡の順で漸減する。この3者は、原産地と遺跡との直線距離もさることながら、道のり（原産地から遺跡にいたる地理的道程）も関連している可能性がある。しかし、この3石材は、3遺跡で構成石材の中かなりの比率を占めている点も特徴としてあげることができる。



第5図 各遺跡の石匙石材構成グラフ

原産地からかなりの量の石匙、ないしは素材が、強力に持ち込まれていると考えられる。これらを主要石材1類とする。

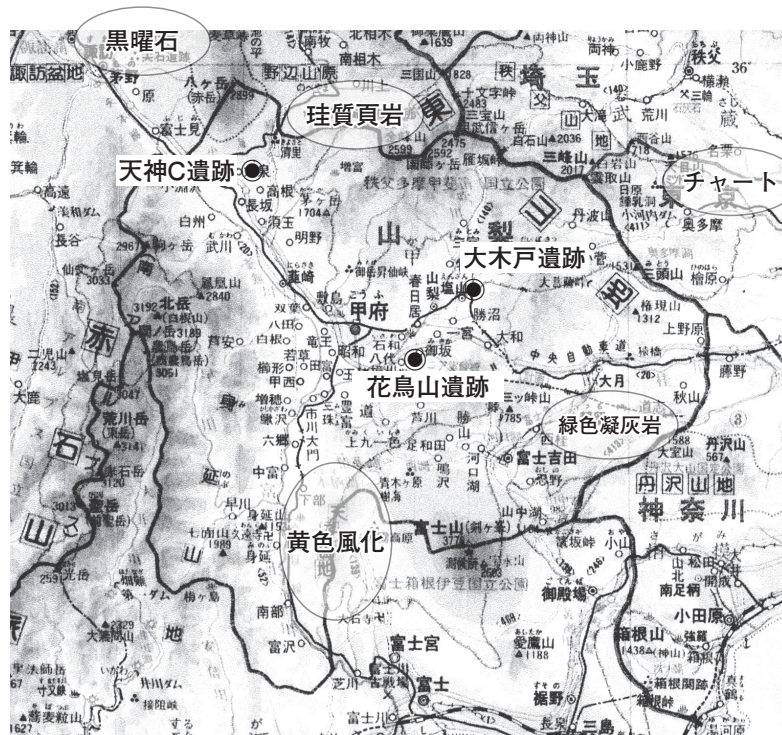
さらに、天神C遺跡の北東方に原産地がある珪質頁岩は、天神C遺跡で最も多いが、大木戸遺跡でも比較的多く、花鳥山遺跡にはみられない。山梨県東部に原産地がある緑色凝灰岩は、最寄りの花鳥山遺跡で最も多く、大木戸遺跡には持ち込まれているが、天神C遺跡にはみられない。比較的石材を得やすい山梨県内に原産地があるにもかかわらず、構成石材に入らない遺跡がある点に留意する必要がある。これを主要石材2類とする。

他の石材については、下呂石、黒色緻密安山岩のように、5種類の主要石材の原産地よりも遠距離に原産地があることが明確なものが含まれる。主要石材2類の存在が確認できない遺跡があるのに対し、主要石材以上に遠距離を旅して遺跡に持ち込まれている点に留意すべきである。これを、非主要石材とする。各遺跡で2割前後の占有率であるという共通点があることも注目しておく必要がある。

それぞれの石材産地と遺跡の地理的位置を第6図に示す。主要石材2類は、主要石材1類よりも近い位置に原産地が存在する。非主要石材の原産地は、主要石材の原産地のさらに外側遠距離にその地理的位置が想定される。

5. 石材漸減の説明原理の引用と分析結果の説明

交換メカニズムについての理論について、コリン・レンフリーによる地中海及び西アジア地域での黒曜石交易についての論功が常に引用され、これを常木晃氏が紹介している（常木1990）。この地域の各遺跡における黒曜石の占有率が80%以上である地域を供給ゾーンとし、供給ゾーン内では「人々は直接黒曜石の原産地まで原石を採取にいった」とした。この地域は黒曜石原産地から実に250~350kmもの距離がその範囲である。そして、その距離から外側に向かっては、黒曜石の割合が距離を隔ててにしたがって急激に減退してゆく漸減曲線が描かれ



第6図 遺跡と石匙石材原産地の地理的位置

る。この地域を接触ゾーンと呼び、「原産地により近い集落より黒曜石の供給を受け、それを集落内で全て消費せずに残りをより遠い集落へ供給した」と考えた。

そこで、説明原理としてこのレンプリューの接触ゾーンを石材漸減モデルとして引用する。石匙の存在は、近隣の遺跡構成員との人格的関係を取り結ぶ、あるいは維持するための贈与の結果と理解し、近隣遺跡への分与によって石匙量が漸減してゆくと考える。

そこでまず、第5図のグラフにあらわれた各石材の漸減状況を、隣接遺跡との贈与論的關係によって数式として表現すると次のようになる。

石材 α の各遺跡の石匙数 (Z) = 前の遺跡から贈与された石匙数 (X) - 次の遺跡に贈与した石匙数 (Y)

まず、贈与が開始される石匙石材原産地あるいは素材剥片生産地では、Xが「生産(供給)した石匙数」となる。そして、XとYとに量の違いがあり、 $X \geq Y$ で表される。次の遺跡に贈与した石匙数 (Y) は、前の遺跡から贈与された石匙数 (X) から捻出されるが、当該遺跡に留保せずに、つぎの遺跡にすべての量を贈与した場合も想定される。

これを具体的なグラフとして想定したのが第7図である。縦軸に石材 α の各遺跡の石匙数 (Z) を示し、横軸に石匙が持ち込まれ、分与によって取り継がれる一連の遺跡を配列した。横軸には、石匙石材原産地あるいは素

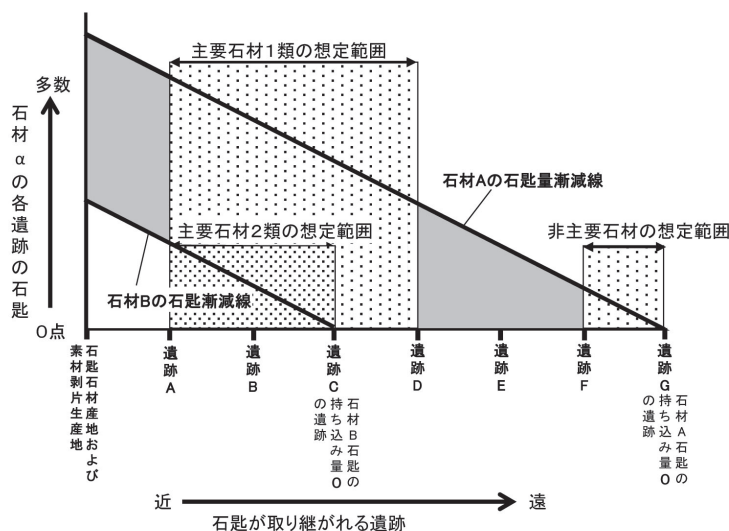
材剥片生産地を左端に位置づけ、それに近い遺跡から遠い遺跡を配列させており、その順位を遺跡A～Gで表記している。

第7図の想定グラフの内、より遠くまで石匙が取り次がれる石材Aの漸減線が主要石材1類、石材Aの石材産地から最も離れた遺跡での状況が非主要石材とすることができる。主要石材2類は、より近い位置で分与量が0点の遺跡が出現する漸減線を描く石材Bを想定することができる。その大きな違いは、石匙石材原産地あるいは素材剥片生産地での原石・素材剥片または製品の供給量と考えられる。最初に遺跡Aに持ち込まれる石匙の量が多ければ多いほど、次の遺跡へ取り継がれる石匙の量が多くなると考えられるからである。

非主要石材は、主要石材1類が遠くにもたらされた姿とすることが可能である。しかし、個々の非主要石材についてみると、県内では漸減傾向がみられず、取り継がれた状況が確認できない。主要石材2類と非主要石材で、なぜこのような違いが出現するのか検討する必要がある。

そこで、実際に遺跡でどのように石匙が不足し補充されるかについて考えることで説明を試みる。

今回取り上げた3遺跡の帰属時期である諸磯式期は、県内に集落が出現する段階であり、移住者の故地で獲得した石匙の石材がまず持ち込まれていると考えられ、その組成が当該遺跡の石匙石材構成状況に影響している可能性がある。特に黄色風化泥岩や緑色凝灰岩は、集落形成以降に集落構成員が贈与を受け、組成に加わったものと考えられる。つまり、当初からある組成の石匙群が保有されており、世代を重ねるにしたがい、石匙を必要



第7図 石材 α の石匙数漸減想定グラフ

とする新たな構成員が加わるたびに、補充されることになると考えられる。

石匙の補充にあたり、直近の石材産地ほど近隣の遺跡の石匙の不足に素早く対応でき、常に贈与品として石匙を送り出せる状況にあったと考えられる。主要石材2類は1類より近い位置に石材産地があるので、不足が生じた場合、速やかにその補充に対応できるが、供給量が少ないため、近隣の遺跡で留保され、あまり遠くの遺跡にはもたらされないであろう。

石匙の不足が生ずると、直近の石材産地の石匙がその欠を補充することが多かったと考えられ、それゆえ、直近の石材産地の石匙が多く存在することになると思われる。遠い石材産地の石材の石匙は、直近の石材産地の石材で不足が充当されている状況でもたらされる機会が多くなり、再び贈与品として別の遺跡へと取り継がれることになると思われる。

しかし、以上の説明では、非主要石材が遠くにもたらされたことの説明にはなるものの、その遺跡で確保され遺存したことの説明にはならない。ここでは次の2点の可能性を指摘するととどめたい。①遠くの遺跡の人間が、何らかの人間関係を背景として、直接持ち込み、ある特定の個人に贈与したもの、②各遺跡には、贈与分ではあるが、近隣遺跡に実際に贈与されずに留保されている石匙が常に存在していた。

6. 結論

石匙は、近隣の遺跡の住人との人間関係形成ないしは維持のための交換財として利用される贈与論的役割を担っていると考えられる。石匙石材供給原産地が、石材ないしは製品を近隣遺跡に交換財として供給し、その供給強度によりその石材の石匙（素材剥片も含め）がどの程度遠くへ到達するかを決定している。交換財として強力に近隣遺跡に供給すればするほど、近隣遺跡での過剰状態が出現し、過剰石匙が遠くの遺跡へと交換財として送り出されて行くと考えられる。また、石材産地における供給量の違いによって、地理的位置が近いにもかかわらず、贈与を受けない石材も出現してくると思われる。多種類の石材の石匙が存在することや、各石材の石匙数の違いは、人間対人間の贈与論的関係を背景として出現してくるものと考えられる。

注

(1) 1952年頃に提示されたアイデアで、明確な著作とはなっていないという（橋爪1988、P99～100）。このレヴィ・ストロースの考察はさまざまな学問分野に影響を与えている。経済人類学においても重要視されている。「《汝与えるがゆえに我与う》という互酬交換法則は人類にとって普遍的で根源的な社会組織の統合原理にほかならない」（山内1994、P182）。さらに現代社会を分析する経済学についても引用されている。「未開

人であれ、現代人であれ、社会を構成する原理は「交換」すなわち「コミュニケーション」の体系であって、それこそが普遍原理」であり、「言語のコミュニケーション、経済の体系、結婚と親族の体系こそが社会を構成する三つの「無意識の構造」である」（佐伯2012、P258～259）。

(2) この件について山内昶氏は、エヴァンズ＝ブリチャードが行ったスーダンの牛牧民ヌエル族の売買の観念についての記録を引用している。やや長いが非常に分かりやすく印象的なので、あえて引用しておく。

「この地方には早くからアラブ商人がやってきて貨幣経済を浸透させていたが、その店で一度何かを買うと、ヌエルの人々はお金がないときでもやってきて、物品をタダでくれるよう要求した。一旦売買関係が成立すると、持てる者は持たざる者に無償であたえる義務があると考えたので、無銭飲食は犯罪どころか当然の権利だったのである。「買うことに対する彼らの考え方は、商人に何かを与えたがゆえに、その商人はあなたを助ける義務を負っている、ということを基本にしている。それは同時に、彼の店にあるものであなたが自分の欲しいものをくれと言えば、彼はそれをあなたにくれるべきだということでもある。なぜなら、彼はあなたの贈物を受け取ったことで、あなたと相互関係にあるからである。だから、コクという語には《買う》と《売る》の両方の意味がある。二つの行為は、相互関係という単一の関係の一表現にすぎない。……ヌエル流の考え方においては、この種の交換に含まれているのは、物と物との関係ではなく、人と人との関係なのである」」（P180～181）。

(3) モースは、人間本性として「ものを贈る義務・衝動」、「ものを受け取る義務・衝動」、「ものを返礼する義務・衝動」があり、この関係は個人対個人の関係ばかりではなく、全体的給付関係を成立させ、あらゆる社会関係の根幹をなしていると提言している。

(4) たとえば第1図土坑出土黒曜石石匙の上段左から3例目、第2図土坑出土の黒色緻密安山岩製石匙、第4図緑色凝灰岩製住居址出土の左端の例は、縦形と分類されるが、つまみの軸が器体の長軸線上になく、やや傾いた角度を持っており、縦形と横形の中間形態と言える。

(5) 遺存した石匙数の成立要因については、さらに以下の可能性もある。

①集落構成員全員に行き渡っていなかった可能性がある。

住居址1軒に対する石匙数（単位石匙数（石匙数／住居址数））は、天神C遺跡が1.7点、花鳥山遺跡2.2点、大木戸遺跡3.3点である。最大でも3点程度であり、集落の全員にいきわたっていなかった可能性がある。常に不足状態だったのか、一部の構成員が携帯するものなのか論議が必要である。

②単位石匙数の違いは贈与量の違いを示す可能性がある。

単位石匙数の開きは、贈与によって持ち込まれた量の違いを示す可能性もある。生活必需品であるならば、この数値は平準化されていたことだろう。このことは、次の遺跡に贈与されずに留保された石匙が存在した可能性を示す。

ただし、この単位石匙数については、次のように各遺跡で石匙数を減数させる要素があるため確定的ではない。大木戸・花鳥山遺跡では限定された幅の調査範囲であり、集落全体を調査していないので、土坑出土が少ないは墓域が調査されていない可能性がある。花鳥山遺跡では住居址さえ部分的な調査である。天神C遺跡では面的な調査ではあるが、耕作のため包含層が失われている可能性がある。いずれの遺跡でも、石匙数はさらに増加する可能性があることは留意する必要がある。

③石匙が伝世された可能性がある。

石匙が近親者などに受け継がれ伝世されるとしたら、遺存数はこの集落の終焉段階に放置された石匙数を示すことになり、単位石匙数は意味をなさないことになる。

の経済へー』講談社現代新書

引用文献

中谷治宇二郎1925「石匙に対する二三の考察」『人類学雑誌』40－4

マルセル・モース1968『社会学と人類学Ⅰ』弘文堂

橋爪大三郎1988『はじめての構造主義』講談社現代新書

長沢宏昌ほか1989『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第45集、山梨県教育委員会

常木晃1990「考古学における交換研究のための覚書（1）」『東海大学校地内遺跡調査団報告1』東海大学校地内遺跡調査団、P191～201

山内昶1994『経済人類学への招待ーヒトはどう生きてきたか』ちくま新書、筑摩書房

新津健・米田明訓1994『天神C遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第97集、山梨県教育委員会

小杉康2000「威信」『用語解説 現代考古学の方法と理論Ⅲ』同成社、P29～35

網倉邦生2003「天神C遺跡出土石匙の起源と系譜」『研究紀要』19、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター、P33～44

石神孝子ほか2003『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第205集、山梨県教育委員会

村松佳幸2003「山梨県出土の石匙についてー主に小型精製品を中心にー」『山梨県考古学協会誌』第14号、P1～12

大工原豊2008『縄文石器研究序論』六一書房

佐伯啓思2012『経済学の犯罪ー稀少性の経済から過剰性